主なる神の彫像と鋳像？

2024.07.21

崔楚英

＜導入＞

おはようございます。

今日は一緒に士師記を読んでいきたいと思います。

士師記　１７：1-6

１.エフライムの山地の出で、その名をミカという人がいた。

２.彼は母に言った。「銀千百枚が盗まれたとき、あなたはのろいの誓いをされ、私の耳にもそのことを言われました。実は、その銀は私が持っています。私がそれを盗んだのです。」すると母は言った。「主が私の息子を祝福されますように。」

３.彼が母にその銀千百枚を返したとき、母は言った。「私は自分の手でその銀を聖別して、主に献げていました。自分の子のために、それで彫像と鋳像を造ろうとしていたのです。今は、それをあなたに返します。」

４.彼が母にその銀を戻したので、母は銀二百枚を取って銀細工人に与えた。銀細工人はそれで彫像と鋳像を造った。こうして、それはミカの家にあった。

５.このミカという人には神の宮があった。彼はエポデとテラフィムを作り、その息子の一人を任命して、自分の祭司としていた。

６.そのころ、イスラエルには王がなく、それぞれが自分の目に良いと見えることを行っていた。

士師記はヨシュアが死んだと、その後を継ぐリーダーがない中で、混乱に陥ります。危機が起こる度に神様が士師を起こさせ、イスラエルを信仰的にさとして、また導く内容が書かれてあります。しかし、士師記時代の民の混乱の状況は解決できず、解決できるところか、ますます酷くなっていきます。今日の本文である１７章はエフライム山地に住む一家族の話です。

６.そのころ、イスラエルには王がなく、それぞれが自分の目に良いと見えることを行っていた。

まず、ミカの家族を通して、「自分の目に良いと見えること」について考えてみましょう。

＜一＞

２節

２彼は母に言った。「銀千百枚が盗まれたとき、あなたはのろいの誓いをされ、私の耳にもそのことを言われました。実は、その銀は私が持っています。私がそれを盗んだのです。」すると母は言った。「主が私の息子を祝福されますように。」

ミカと彼の家族は神を信じる者たちです。そして彼が盗んだ銀 1100 枚は結構な金額です。１０節を参考にすると、一人のレビ人の年収が銀 10 枚でした。するとミカが盗んだのは一人の年収の 110 倍に相当するものです。それを盗まれた母が怒ることは当然なことかもしれないです。しかし、その怒りで相手を呪ってしまうのです。それから盗んた人が自分の息子ミカであることを知った時には、すぐに「主」つまり神様の名前で呪いを祝福に言い換えるのです。
ここからミカの家族は裕福であって、ミカの母は赦しがとても速い人であることがわかります。赦すことが悪いことだという意味ではありません。

十戒には「盗んではいけない」という戒めがありました。彼らはイスラエルの民ですから、当然そのことも知っているでしょう。「盗んだ」という罪は神様に対して行ったにもかかわらず、ミカの母がとても速く、自分からその赦しを宣言しているところです。神様の名を借りて彼の回復を宣言しているのです。

実はこの過程で彼らが省略してしまったものがあります。それは神様に対しての「悔い改め」と悔い改めをするときに出てくる「苦しさ」です。

悔い改めにはつらい感情が伴います。過ちを認めると同時に、私たちの心では自分の罪をじっくりと見つめること、間違ったことを認識する過程が必要です。罪の悔い改めには、神や人の前で、自分が今まで正しいと思い、考え、そして行動していたことが実は間違えだったと認めることですね。ですので、その過程では自分のプライドが傷つく、恥ずかしい感情、申し訳ない感情が生まれます。悔い改めは決して楽しいものではないのです。

しかし！大切なのは、このような苦しみと、神様に向けて赦しを求める過程があるからこそ、神様を豊かに知ることできて、その過程があるからこそ、神とより深い信頼が築かれるのです。

もちろん、この過程に入りすぎて、赦してくださる神様を忘れてしまうこと。 また、自己卑下しすぎるのも問題ですが。神様の愛を覚えながら、自分自身の罪をじっくりと見つめ、主の前に告白と悔い改めをすることは、必要なものでありながら、心理的に苦しみが伴うものです。決して楽ではないです。

人間と人間の間も同じですね。互いにトラブルがあったとき、少し気まずくなる会話、自分のプライドを傷つくかもしれない「ごめんなさい」という一言、このような会話の中で、私たちは相手を赦したり、また赦されたりすることを体験しながら、お互いの信頼が深まるのではないでしょう。

今、ミカの母親は、ミカのこの悔い改めの過程において、この苦しみを省略してしまいました。すぐに消してしまいました。彼に対して宣言した祝福はあまりにも速いです。彼女自身だけでなく、神との関係の回復においても簡単に、神様の名前を借りて、宣言しているのです。ミカの家族と神様との間には宗教的な関係で結ばれていることが分かります。

そして、3 節では、彼の母は戻された銀を[聖別][主][献げていました]という言葉を使っています。一見格好よく聞こえる言葉でもありますが、彼女が神様に献げようとしているのは彫像と鋳像です。これもご存じの通り十戒の中で 2 番目の戒めを破ることですね。
「聖なる、主、献げる、祝福」など、いいことばですが、実は最も守るべき十戒はとても簡単に無視するのです。

＜二＞

次は彫像と鋳像について考えてみたいと思います。偶像とも呼ばれるものでしょう。

[出エジプト記 ２０:４]
４.あなたは自分のために偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、いかなる形をも造ってはならない。

ここで、彫像と鋳像について考えてみたいと思います、いま読んだこの言葉と今日の本文で彫像と鋳像、つまり偶像をつくる時の言葉は「自分が自分のために」です。

偶像をどのように定義すればよいでしょうか？ある本では、神様より大切にしているものが偶像だと書かれてありました。まさにその通りだと思います。皆さんはいかがでしょうか？異邦人が仕える神々？カエルや、わしの形をしたもの？もっと考えると自分？周りの人、或いはお金？いろんなものが偶像、つまり神様よりも大切にしているものになる可能性がありますね。誰でも一回は考えたことある課題ではないかと思います。今日は神様の形をとった彫像と鋳像について考えてみたいと思います。

彫像は大きい塊の物を鋭い物で彫刻して像を作ることです。
鋳造とは、金属加工法の一つで、原材料を高い温度で加熱して液体にした後に型に流し込んで、冷やして目的の形状に固める加工方法です。

像と言ったら、イスラエル民が造ったものが一つありますね。覚えているでしょうか？出エジプトした後、シナイ山到着し、モーセが十戒を神様からいただく間に、民たちが牛の像を造って

いました。

［出エジプト記　３２：3-5］
３民はみな、その耳にある金の耳輪を外して、アロンのところに持って来た。
４彼はそれを彼らの手から受け取ると、のみで鋳型を造り、それを鋳物の子牛にした。彼らは言った。「イスラエルよ、これがあなたをエジプトの地から導き上った、あなたの神々だ。」
５アロンはこれを見て、その前に祭壇を築いた。そして、アロンは呼びかけて言った。「明日は主への祭りである。」

これでわかるのは、彼らは鋳造を造ったのです。そして「これがあなたをエジプトの地から導き上った」という言葉を発します。この像は神々と書いてあるのでエジプトで見たある偶像を思い出したとも言えるますが。５節では、「主への祭り」と書いてあります。新改訳聖書は旧約において、神の御名を太字の「主」で表しています。通常使われる「主」と区別するためです。

この箇所で造った子牛はエジプトから導いてくれた方、主なる神様を表せるものを考えて造ったということですね。彼らが持っている神様の名前、持っているイメージ、なさったわざ、総合的に色々考えた上で一番心にしっくり来るものを造ったのです。

神様と関係ない全然違う偶像を造ろうとしたわけではなく、神様の姿として一番心にしっくりと伝わるもの造ったのです。ですからその出来あがった鋳物の子牛を見た民たちは喜んで、それに同意して、「確かにこれこれ」と踊っているのです。
しかし、よくご存じの通り神様はこのことでイスラエルに対しての怒りが燃え上がります。このことを許さないです。彼らの動機が「神様を礼拝するためという動機であったとしても」像を造ることは禁じられます。

像はあるものの断片的な特徴しか表現できないです。表現できる神の姿は限られています。この牛の像を例にとると、牛は神の力強い姿をある程度反映できるかもしれないです。ですが、神の愛、赦し、忍耐等々の無限の姿は反映できません。反映できたとしてもある程度でしがないです。
ですので、像を造るという行為は、ある意味では像を造る人が、一番強調したい、信じたい、表したい一部分のみを限られた範囲で反映できるものです。

人は「自分が信じたい」「見たい」「認めたい」「自分の目に良いと見える」神様像を造れるのです。神様の性質の一部を型取り、全能なる神様の神像を心の中で、実際に知らずうちに作れちゃうのです。自分の手で造ったものを自分が思う通りの理想像に従えるのです。

１５年前でしょうか、クリスチャンになって間もないころ、前通っていた教会のあるリーダーの方に「旧約は今の時代にあわないかも」と言ったことがあります。「なんかちょっと厳しそうで、冷たそうで、理解できない神さまだから」と少し不満を言ったことあります。でしたら。あのリーダーの方は「自分が理解しやすい、納得しやし、自分が守れそうな掟を出してくれる神様像は偶像にちかいよ、チョヨン、それは半分の信仰だよ。」と言われ、はっとさせられたことがあります。たしかに！と思いました。私は自分が仕えやすい、守れそうな掟は固く守っていて、それをもって他の人を裁きますが、教えていたが、自分が同定守れそうではない掟に関しては言葉を捻じ曲げたり、従えない理由を探している自分にきづかされました。とても恥ずかしくて、本当に神様に申し訳ないなと思いました。

自分も知らずうちに「自分が信じたい」「見たい」「認めたい」「自分の目に良いと見える」神様像を造ってしたがっていたのです。

＜三＞

士師記の時代はとても混乱な時代だともよく言われています。その特徴を持ってる理由は神様を知らない世代だと記録しています。

[士師記　2：１０]
１０.その世代の者たちもみな、その先祖たちのもとに集められた。そして彼らの後に、主を知らず、主がイスラエルのために行われたわざも知らない、別の世代が起こった。

とあります。ここでの知らないとは知識的に知る、ということを指すだけではなく、よく観察して、考えて、そこから教えられて、また主なる神を経験していくことですね。
その次の世代がこのようなことをしなかったのです。ミカの家族は神様の存在は知っていたでしょう。しかし、神様のすべての面を知ろうと、観察して、考えて、教えられていたわけではないです。自分たちすきな、受け入れやすい、従いやすい神様の一部分を知っていたかもしれないです。

５節を見てみましょう。
5.このミカという人には神の宮があった。彼はエポデとテラフィムを作り、その息子の一人を任命して、自分の祭司としていた。

エポデとテラフィムだとありますが、エポデは大祭司が着る 12 個の宝石ある服のようなもの

です。テラフィムは創世記３１章などいろんなところにでてきますが、小さな偶像であって、家族の守ってくれる偶像のことです。

主なる神様のからも気に入る部分を取って像にし、宮に入れ、他の神々からも気に入る部分も取って自分の宮に入れるのです。気に入るものいっぱいの宮ですね、自分基準のお気に入りの物で満ちてる礼拝をしています。彼らが言っている「主」主、はどこにいるでしょう？だれでしょうか？

新約時代に入って、今の私たちは目に見える、偶像をドンと造ることはあんまりないでしょう。旧約の人達と私たちの行動には違いがあるかもしれないですが、心の中での神様に対しての反発心と偶像を造り出す心は同じです。

ミカの母は深く考えず、神様をもっと知ろうと御言葉の中で悩んで自分自身の罪を見つめる過程を省略して、神様のどのような面でも気に入らない部分を知的にも心理的にも無視してしまうことが、今を生きる私たちにも十分ありうるということです。

彫像は完全な形をした形状に削り出して造る方法であり。鋳像は作ろうとしている形をすでに用意して、銀や金を溶かしてその中に充填する方法です。私たちは自分も知らずうちに、気づいてないうちに神様の言葉を守りやすいように削っていないか？神様を自分が造った型にはめようとしていないか？神様の言葉を自分が守れそうになるように捻じ曲げていないか？今時代だからこそ、よく考える必要がある課題だと思いました。

＜四＞

６.そのころ、イスラエルには王がなく、それぞれが自分の目に良いと見えることを行っていた。

これはおそらくダビデ王を想定して書いてある言葉と言えます。
実は彼らの本当の王は神様です。王がいなかったのではなく、王を知ろうとしなかったのですね。

王を知ることは簡単なことではありません。なぜなら、自分の中にある信念と戦わなければならないからです。だから、いつも楽しいことばかりではありません。神様を知ろうとする過程において悩む時があり、神に怒る時もあり、泣く時もあるが、それでもついていきますと、神様に真剣に向き会おうとする決心が必要です。

士師記はヨシュア記の続きであるとも言えます。カナンの地まで導くのがヨシュアの任務でし

た。そして、土地を割り当て、これからこれらの町々にあなたたちは住むから占領していきなさいと神様の命令を伝えます。それからこのような言葉をいいます。

[ヨシュア記 ２３:１０-１１]
１０.あなたがたは一人で千人を追うことができる。あなたがたの神、主ご自身が、あなたがたに約束したとおり、あなたがたのために戦われるからである。
１１.だからあなたがたは自分自身に十分に気をつけて、あなたがたの神、主を愛しなさい。

君たちは必ず勝つだろう。自分自身に気をつけなさい。 神を愛しなさい。
どんな自分の手で造った偶像も神様と自分の間に入らないように気をつけなさい。ということですね。

イスラエルが出エジプトした出来事が今ですと、救いを象徴するものでしたら、約束の地カナンに入ってからの生活は、クリスチャンになってこの世で生きる生き方を表しているものだとしても過言ではないでしょう。
士師記の民たちの生き方は私たちの半面教材としてよく使われています。聖化していくのはなく、どんどん堕落していくのです。「自分の目に良いと見える」がままに生きているのです。

ヨシュアは死ぬ前に、これから戦争に出るイスラエルの全部族を集めてこのような言葉をつげます。
[ヨシュア記 ２４:１４-１５]
１４今、あなたがたは主を恐れ、誠実と真実をもって主に仕え、あなたがたの先祖たちが、あの大河の向こうやエジプトで仕えた神々を取り除き、主に仕えなさい。
１５主に仕えることが不満なら、あの大河の向こうにいた、あなたがたの先祖が仕えた神々でも、今あなたがたが住んでいる地のアモリ人の神々でも、あなたがたが仕えようと思うものを、今日選ぶがよい。ただし、私と私の家は主に仕える。」

です、これからカナンの地に入る民たちに選択するように促します。そして民から 3 度の決心の言葉をもらいます。
18ｂ.私たちもまた、主に仕えます。このお方が私たちの神だからです。」
21.民はヨシュアに言った。「いいえ。私たちは主に仕えます。」
24.民はヨシュアに言った。「私たちの神、主に仕え、主の御声に聞き従います。」

イエス様がペテロに 3 度「ペテロよ、私を愛してるか？」と質問したことが思い出すようなことばですね。いい方はイエス様より厳しく聞こえるかもしれないですが、言いたいのは「神様を

愛してください、仕えてください」「たとえ途中で失敗したとしても、神様を愛し続けてください、仕え続けてください」と死の前の最後の説教で切に願っているのです。

それくらい、神様を愛すること、神様そのまま受け入れ従うことは難しいことで決心が必要です。自分の手で造った偶像、神様の形をしている彫像と鋳像を砕き続けないといけないです。そして、本当の全知全能の神を知っていき、受け入れていき、従っていくのです。この過程をへてからこそ、神様への信頼が、真の平安が、真の喜びが真の愛を本当の意味で「知る」ことができるのではないでしょうか。

＜結論＞

まとめです。士師記の時代は混乱な時代です。「自分の目に良いと見える」こと行い、神を知らない、知ろうとしない時代です。しかし、彼らの心の中にある反抗は、今この時代を生きている私たちの心の中にあるものとそこまで違わないです。

「だからあなたがたは自分自身に十分に気をつけて、あなたがたの神、主を愛しなさい。」

という言葉は今この世をクリスチャンとして生きる私たちに語ってくださる言葉です。神の似姿に変えられていくことを決心する一人一人に切に願っていることであると思います。

聖化の過程は簡単ではなく、時には自分の心を裂けるような苦しみも伴います。その過程をスキップせず、今が私たちの中にある、自分が自分のために造った神様の像を砕くという思いで、主をもっともっと知っていきましょう。聖霊様がその過程において私たちをさとし、教え、力づけてくださるでしょう。一緒に神様に仕えていきましょう。神様を愛していきましょう。

お祈りいたします。